

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24330246

研究課題名(和文)中等国語科における生産的な読み手育成のための読解力・授業力診断評価システムの開発

研究課題名(英文)Developmental Study on Assessment System of Productive Reading

研究代表者

間瀬 茂夫(Mase, Shigeo)

広島大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：90274274

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 13,700,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、「生産的な読み手」を育成するための、学習者と授業者の評価システムの開発を行うことを目的として研究を行い、次のような成果が得られた。1)「生産的な読み手」の読解モデルを提示することができた。2)モデルに沿って、5領域(評論・小説・古文・漢文・言語事項)の高次読解力を測定する評価問題と、ルーブリックを実態調査を通じて作成することができた。3)国語科の高校教師および教員免許取得学生に対して、診断評価システムを用いた授業力の評価・育成する研修や授業を実施し、有効性を確かめることができた。4)研究成果を教師向けのハンドブックとして教材化するとともに、ウェブ・システムに集約することができた。

研究成果の概要(英文):We define the readers who comprehend text critically and reasoningly as productive readers. Today it is important to foster the productive readers in high school. 1) First, we constructed the model of productive reading. 2) We developed the system to assess the performance of productive readers in five areas of reading instruction, reading and analyzing novels, expository texts, Japanese classics, Chinese classics and Japanese language. 3) We made set of paper tests and rubric to exam productive reading through the research for the high school students in all five areas. 4) In the classes of Japanese teachers training program at Hiroshima university, we made the students to assess the response of high school students for texts with the rubric, and proved availability of the assessment system for elevating their ability to instruct productive reader.

研究分野：国語教育学

キーワード：高校 国語科 高次読解力 生産的読み手 評価 ルーブリック 教師教育

1. 研究開始当初の背景

我が国において、文学研究の成果(読書行為論)を取り入れる形で、1980年代から生産的な読み手像が提示され、実践的な探究も行われてきた。2000年教育課程審議会答申による「目標に準拠した評価」の全面採用、現実的社会的文脈に置かれた学習活動による教育評価の紹介(ギブス『新しい評価を求めて』鈴木秀幸訳、論創社、2001年)、PISAや文部科学省によるパフォーマンス評価を取り入れた学力測定の実施などを背景として、「生産的な読み手」を育てる授業実践の開発は行われている。しかし、中等教育段階、特に高校にあっては、文部科学省による学力調査が行われていないこと、完全な客観式テストである大学入試センター試験の影響力の強まり(私立大学入試への導入)などから、そうした学習指導の開発は十分ではない。高校段階における読みの各領域に沿って、生産的な読みを質的に評価する評価指標をともなった、授業改善に資する診断・評価システムが必要である。

2. 研究の目的

文章に明示的な言語的情報を理解するばかりでなく、既存の知識や情報と結びつけて推論したり、批評したりしながら読書行為を行う「生産的な読み手」を育成することは、我が国の国語科教育とりわけ中等教育段階の読みの学習指導が取り組むべき課題である。こうした読み手像は文学研究によって切り開かれてきた。本研究は、文学研究と国語科教育研究における研究成果の発展的な融合を通して、高校国語科の読みの4領域(評論・近代文学・古文・漢文)に沿った「生産的な読み手」の読解モデルおよび授業モデルを提示するとともに、モデルに沿って、学習者の読解力、教師(学校現場の教師と教育実習に行く学生)の授業力を診断・評価し、授業改善の示唆を得る評価システムを開発し、その有効性を検証することを研究目的とする。

3. 研究の方法

高校段階を対象に、「生産的な読み」の能力を評価し、育成するため、次のような研究方法を設定した。

- 1) 高校の「読むこと」の領域に共通する、

生産的な読みをモデル化する。

- 2) 共通的なモデルに基づき、各領域ごとに「生産的な読み」を評価するための評価問題を作成し、調査を通して評価指標を作成する。

- 3) 評価問題及び評価指標を用いて、教師の授業力を評価し、改善させる。

以上の研究方法に基づき、次のような手順で研究を行った。初年度には、読みの読解モデルの授業モデルの構築を行うとともに、モデルに沿った学習者に対する読解力調査問題の開発に取り組んだ。両モデルの構想にあたっては、言語生活や現実的な国語科授業に沿ったものにするため、先駆的な授業の観察・分析を通して行った。なお、対象とする領域として、言語事項領域を加えて、5領域とした。

二年次には、開発した読解力評価問題について、パイロット調査を実施し、妥当性を検証したうえで、本調査を行い、高校生の生産的な読みの能力の分析を行うとともに、評価のためのルーブリックを作成した。

三年度目には、前年度までの研究成果を教材として、国語科の高校教師と教員免許取得学生に対して、「生産的な読み」の能力を育成するための問い作りと授業構想、学習者の読みの評価方法を改善するための研修および授業を行った。

4. 研究成果

(1) 領域共通の読解モデルの設定

各領域について、次の五つの問いの水準を設定した。

- ① 読みの構えを問う…本文を読む前に、読み手の既有知識を用いて推測を行うことでテキストに関わる力を問う。
- ② 本文を問う…本文に明示的な情報・内容を理解する力を問う。
- ③ テキスト世界を問う…非明示的な内容を推論・解釈し、テキスト世界を理解する力を問う。
- ④ 書き手と読み手の関係を問う…テキストにおける表現方法・技法やレトリックなどの効果を分析し、評価する力を問う。
- ⑤ テキスト世界と現実世界の関係を問う…テキスト世界における問題と読み手が存在する現実における問題とを関連させて考える力を問う。

これらは、「読解」についての次のような認識に基づいている。まず、文章を理解することは、文章として表された言語に対して、あるコードを用いて意味を読み解くという側面(②)ばかりでなく、読み手が何らかの目的をもってテキストに対峙し(①)、自らの持つ知識を用いて言語表現を手がかりにして仮説を立て、自分なりの解釈や新たな意味を生成するという側面(③)が大きいと考えている。

次に、読むという行為は、文章の書き手と読み手との対話であると考えられる。文章表現は、語り手がだれかに語るという構造をとらざるを得ない。そのため、書き手の認識や思想は言語によって規定されているが、かといって自らの認識や思想を文章表現にそのまま映すことはできない。文章表現においては、読み手に対して効果的に伝えるためにさまざまな表現方法が用いられ、意図的あるいは無意識的に物事の一部や一面のみが語られたり、そのことがうまくいかなかったりといったことが生じる。したがって、読み手は意味を生成し、文章が表しているテキスト世界を理解するとともに、そうした書き手による文章の表現行為を評価しながら読み進める。④は、こうした側面を取り立てたものである。

さらに、文章を読むことは、言語的情報を処理する行為としてではなく、そのことを通して書き手や読み手が自らの知識や認識を更新する行為とみなす考え方があり、書き手は、既定の知識を前提や根拠として、自らが新たに得た認識を読み手に伝えようとする。読み手はそれを受け取るとともに、自らの既存の認識に取り込み、認識を更新するべきかどうかについて批判的に判断する。⑤は、こうした側面に沿ったものである。

このような文章を読むことに対する認識は、いくつかの理論的な背景を持つ。その一つは、読者論・読者反応理論の考え方である。文学作品を読むことを、作品に隠された作者の意図、作品の意味を読み解くことととらえるのではなく、読者が作品の構造に戦略的に反応しながら、意味を構築することととらえるのである。

では、その過程において、読み手はどのような知識を用い、どのように認知を形成するのか。そうした認知構造を問題とするのは、

認知心理学・認知科学である。本研究の読解モデルにおける②と③の区別、⑤の設定は、テキストベースと状況モデルという二つの表象の形成によって文章理解過程をとらえるヴァンダイクとキンチュの文章理解モデルに影響を受けているが、PISAの読解リテラシーの背景にもこのモデルがあると考えられている。

④の設定には、修辞理論と物語論の影響がある。それは、形式的な側面と内容的な側面の両面においてである。文章の修辞的な表現や物語構造を分析し評価するというのは、形式的な側面である。世界の認識に比喻や隠喩など修辞的なとらえ方や物語的なとらえ方が深く関わっていると、文章や文学作品において提示される知識や認識が、どのようなとらえ方を前提としているかを批判的に理解しようとするのは、内容的な側面である。

読解力の高次化は、社会の要求が高度なものになったことだけでなく、こうした文章や文学を読むこと背景となる理論的枠組みの発展によるものでもある。

(2) 読解力評価問題の開発

学力評価問題による評価の実行は、①高次読解力に焦点化した評価問題の作成、②ルーブリックの作成、③評価問題および評価指標を用いた学力評価の診断という手順を踏む。

まず評価問題の作成であるが、前述の読解モデルの枠組みにしたがい、領域ごとに記述式の読解力評価問題を作成した後、パイロット調査を行い、問題を修正した。その際、古文・漢文では「②本文を問う」の割合を大きくし、「④書き手と読み手の関係を問う」を小さくするなど、評論、小説、古文、漢文そして言語表現という文章ジャンルや領域の持つ特性にしたがって読解モデルを調整した。次に、修正した問題を用いて高校二年生に対する調査(本調査)を行い、得られた解答の分析を通して、ルーブリックを作成することにした。ルーブリックは、解答における思考の質的な違いを表す二〜四段階の基準になるよう心がけて作成した。

このようにして作成した読解力評価問題とルーブリックを用いて、各教師が自分の担当クラスにおいて、調査を実施し、学習者が第一学年の国語科の授業で身につけた読解力がどのようなものであるかを評価するこ

とになる。各領域ごと作成した問題の設問の構成は、次の通りである。

① 評論領域

出典：木下直之(2003)「建築はあやしい お城も宮殿も原爆ドームも」、安藤忠雄ほか『「建築学」の教科書』、彰国社、pp. 265-288。

問題1 読者としての自己、自己による読前
の内容予想と文章内容との関係の把握。

問題2 (1)内容把握、範囲・構成

(2)抜き出し、要点把握、表整理、概念化

(3)言語問題、同一語の意味の分類

問題3 想定された読者の分析、文章の説得
性を問う問題

問題4 結論の論証過程と、レトリック表現
における多義的意味の解釈を問う問題

問題5 冒頭の効果を問う問題

問題6 本文で説明している建築の意味の
とらえ方を、写真の中の建築に適用し、そ
の意味を問う問題

② 古文領域

出典：高橋貞一校注『平家物語 下』、講談社
文庫、1972、pp. 174-176。出題にあたり表
記を一部改めた。

問1 文語文法の理解

問2 古語の原義をもとに作者の表現の仕
方を問う

問3 内容理解

問4 (1)内容理解

問4 (2)現代語訳の適切さを発話者の心情に
即して説明

問4 (3)物語構成や人物・出来事の語られ方
から作品の問いかけを考える

問5 書かれた表現がどのような意味を持
つのか推論

問6 物語構成や人物・出来事の語られ方
から作品の問いかけを考える

③ 漢文

出典：『淮南子』人間訓

問題1 内容把握

問題2 文法理解・内容把握

問題3 (1)内容把握

問題3 (2)楽羊の行為に対する作中人物の評
価を問う

問題4 (1)楽羊の事例(本文)に対する書き
手の評価を問う

問題4 (2)本文の内容を現実の事例に置き換
える力を問う

問題5 書き手の解説を評価し、本文におけ

る楽羊の行為を評価する力を問う

(3) 読解力調査の分析—評論領域の場合—

評論の読解力調査は、広島県の公立高校2
年生、3クラスを対象に、2013年7月に調査
を実施した。県内でもトップクラスの公立高
校である。40分程度の解答時間で解答して
もらった。

集計は、その学校の中の「標準クラス」と
「最上位クラス」に分けて行いました。標準
クラスと最上位クラスの平均点を比較し、1
0%以上の差がついたのは、問3の読者によ
る説得力の違いを問うた設問、問4の論証に
おける一般化の文について問うた設問、問6
のテキストから学んだことを他の建築に適
用することを求めた設問である。問2など、
客観的な意味について問うたものについて
は、どちらのクラスも同じくらいよくできて
いたが、こうした問題では成績上位者との間
で差が生じた。一方で、問5の冒頭の段落の
レトリックの効果を問う問題については、同
じように評価が低かった。

(4) 評価問題およびループリックの活用

学力評価問題は、読解モデルにしたがって
作成することで、「読むこと」の単元の授業
展開に沿うものとした。したがって、学習者
の学力評価であるとともに、教師にとっては、
授業評価を行う際のモデル的事例となると
考える。評価問題における設問を授業におい
て高次読解力を身につけさせるための学習
課題のモデルとしてとらえ、日常の授業にお
いてそのような高次読解力を問う学習課題
(発問や問い)を設定しているかという観点
から、自分の授業について授業評価を行うの
である。また、評価問題を通して、各ジャン
ルや領域において高次読解力を問う問いが
どのようなものであるかについて、教師が事
例的に学修することも可能となると考えた。

最終年度には、次のような国語科の高校教
師および教員免許取得希望者に対する研修
と授業を行って、開発した評価問題とループ
リックからなる授業力診断システムの有効
性を確かめた。

広島県教育研究会国語部会 授業改善セ
ミナー 2015年1月から3月 広島県立
五日市高校および安田女子高校で実施
広島大学教育学部国語文化コース4年次

授業科目「国語科教育評価論」受講者を対象とした演習 2014年6月に実施

こうした研修と授業をふまえ、評価問題およびルーブリックの活用方法を次のような手順として設定した。

1 学力調査を活用した授業の実施

- ①調査を実施し、解答を分析する。
- ②問いの一部を除いて自己採点させ、解説を行う。
- ③高次読解力を問う設問を一つから二つ取り挙げ、解答例をもとに、学習者と評価基準を共有し、相互評価を行わせる。

2 新しい教材による単元の実践

- ①読解モデルにもとづいて指導過程を構想する。
- ②読解モデルや調査問題を教材に適用し、高次読解力を問う発問・学習課題を工夫する。
- ③高次読解力を問う学習課題を提示したり、学習者とともに設定したりする。
- ④高次読解力について、どのような評価するのか、学習者と評価基準を共有し、相互評価を実施する。

3 総括的評価への反映

- ①レポートなど、時間をかけて取り組む分量の多い文章表現によるパフォーマンス課題によって、高次読解力を評価する。
- ②定期テストなどのペーパーテストにおいて、短い時間ですばやく取り組む分量を限った文章表現を求める設問によって、高次読解力を評価する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 11 件)

- ①国語学習における知識の創造を媒介するメディアについての検討：対話メディアとしてのパターンランゲージの検討を中心に、富安慎吾、『国語科教育』全国大学国語教育学会，査読有，75，pp.80-87，2014
- ②昭和二十年後半における国語科教育課程の変化—福岡県門司市（当時）の実践的研究を資料として—，河野智文，福岡教育大学国語科研究論集，査読無，第55号，pp.1-14，2014
- ③古文学習の課題—学力評価問題パイロット調査から—（上），竹村信治，論叢国語教育学，査読無，9，pp.65-75，2014
- ④古文学習の課題—学力評価問題パイロ

ット調査から—（中），竹村信治，国語教育研究，査読無，55，pp.55-66，2014

- ④何を読むのか—教科書の古典「文学」—，竹村信治，日本文学，査読有，2014-1，pp.2-17，2014
- ⑤中学校で、評論(説明的文章)を、なぜ読ませるのか，間瀬茂夫，日本語学，査読無，第32巻第15号，pp.4-12，2013
- ⑥全学教職課程の質保証に関する実証的研究（1）—平成22年度入学生の経年変化を中心に—，高旗浩志・後藤大輔他，岡山大学教師教育開発センター紀要，査読無，第3号，pp.80-89，2013
- ⑦読むことの「授業」はなぜ必要か，山元隆春，学校教育，査読無，1153号，pp.6-11，2013
- ⑧ブッククラブとリテラチャー・サークルの可能性，山元隆春，月刊国語教育研究，査読無，497号，pp.28-31，2013.
- ⑨説明的文章における知識と教材の類型—中学校二年生教材を中心に—，間瀬茂夫，国語教育論叢，査読無，第21号，pp.43-52，2012
- ⑩昭和30年代後期の漢文教育思潮における「漢文の多重性」についての認識，富安慎吾，『国語科教育』全国大学国語教育学会，査読有，71，pp.19-26，2012
- ⑪『伊勢物語』二十一段の表現性，武久康高，高知大学教育学部研究報告，査読無，第72号，pp.31-38，2012
〔学会発表〕(計4件)
- ①高等学校における評論の読みの学力評価—学力調査による分析—，全国大学国語教育学会，間瀬茂夫・守田庸一・宮本浩治，2014年11月8日，筑波大学
- ②昭和三十年代前半における国語科基礎学力論の検討，河野智文，全国大学国語教育学会，2013年10月26日，広島大学
- ③パターンランゲージによる方略記述実践の可能性：メディアとしての方略記述について，富安慎吾，全国大学国語教育学会，2013年5月19日，弘前大学
- ④初任期教員対象の授業力向上支援プログラムの研究開発，高旗浩志・藤原敬三他，日本教師教育学会，2013年9月15日，佛教大学
〔図書〕(計5件)
- ①中等国語教育，山元隆春編・間瀬茂夫・河

野智文・守田庸一・宮本浩治他，協同出版，
pp. 1-146, 2014

②言語コミュニケーション能力を育てる，山
元隆春・間瀬茂夫・守田庸一・宮本浩治・
冨安慎吾他，世界思想社，pp. 1-330, 2014

③沖縄の学力追跡分析，山崎博敏編・間瀬茂
夫他，協同出版，pp. 1-146, 2014

④エリン・オリヴァー・キーン『理解するっ
てどういうこと？』，山元隆春・吉田新一郎
共訳，新曜社，pp. 1-425, 2014

⑤ジェニ・デイ他『本を読んで語り合うリテ
ラチャー・サークル実践入門』，山元隆春訳，
溪水社，pp. 1-191, 2013

〔その他〕

ホームページ

<http://jlitera.hiroshima-u.ac.jp/>

国語学力フォーラム：形成と評価

6. 研究組織

(1) 研究代表者

間瀬 茂夫 (MASE Shigeo)

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：90274274

(2) 研究分担者

山元 隆春 (YAMAMOTO Takaharu)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：90210533

竹村 信治 (TAKEMURA Shinji)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：80146705

佐藤 大志 (SATO Takeshi)

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：90309625

川口 隆行 (KAWAGUCHI Takayuki)

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：30512579

小西 いずみ (KONISHI Izumi)

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：60315736

河野 智文 (KAWANO Tomofumi)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70304144

高旗 浩志 (TAKAHATA Hiroshi)

岡山大学・教師教育研究センター・教授

研究者番号：20284135

守田 庸一 (MORITA Youichi)

三重大学・教育学部・准教授

研究者番号：60325305

宮本 浩治 (MIYAMOTO Kouji)

岡山大学大学院・教職大学院・准教授

研究者番号：30583207

武久 康高 (TAKEHISA Yasutaka)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・

准教授

研究者番号：70461308

冨安 慎吾 (TOMIYASU Shingo)

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：40534300

小谷 充 (KOTANI Mitsuru)

島根大学・教育学部・教授

研究者番号：00283044

(3) 研究協力者

辻 尚美 (TSUJI Naomi)

広島県立広島高校・教諭

舟橋 秀晃 (FUNAHASHI Hideaki)

大和大学・教育学部・准教授